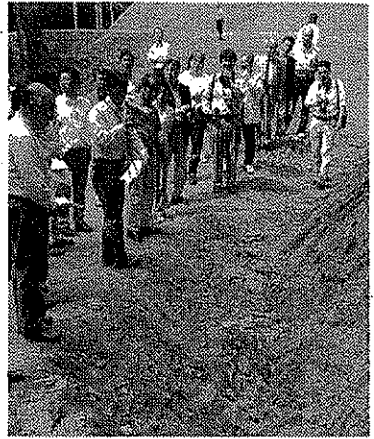


高山の林建協働などを

技術の新分野活用に関心

新事業や技術開発に取り組み全国の建設業者と、その支援者で組織する建設トップランナー倶楽部幹事会（代表幹事・和田章日本建築学会会長、米田雅子慶応大学特任教授）が、5月31日から6月2日にかけて、建設業の林業への本格参入の先導事例である岐阜県高山市のたかやま林業・建設業協同組合や、同市で独自の農業を行う和仁建設（同県下呂市でワサビ栽培に挑戦する下呂建設協同組合（大山龍彦理事長）は、建設会社17社と飛騨高山森林組合の計18者が「林建協働」で2010年1月に設立した。11年度の実績は、作業道開設2万7100㎡、境界明確化4200㎡、利用間伐83枚、木材生産2200立方メートルなど、公有林を中心に手掛けた。



排水に配慮された林業専用道を視察する参加者

建設業の管理手法や技術の新たな分野での活用、環境対策などが参加者の関心を集めた。「欧州の技術を導入」たかやま林業・建設業協同組合（大山龍彦理事長）は、建設会社17社と飛騨高山森林組合の計18者が「林建協働」で2010年1月に設立した。11年度の実績は、作業道開設2万7100㎡、境界明確化4200㎡、利用間伐83枚、木材生産2200立方メートルなど、公有林を中心に手掛けた。

性や生産性を考えた木材技術と、森林技術者や技能者の養成が重要」と話した。「食味を最優先に」和仁建設（和仁松男社長）は、中山間地での雇用の維持や、耕作放棄地への対策を目的に、2000年度に農業に参入した。その後、食味を最優先としたコメ作りを目指し、自社育苗による作付時期の変更や、収量を一定に抑える適正収量の厳守、有機低農薬栽培など独自の農業を展開。コメの食味分析鑑定コンクール国際大会で金賞受賞を重ねるようになった。

と地域の元気回復事業」として09年にスタート。栽培方法の確立に向けて試験栽培の試行錯誤を繰り返している。使われなくなった既存の簡易水道や淡水魚の養殖池を有効活用しており、視察参加者はこれらの施設を熱心に見学した。

異種の道のネットワークづくりへ

説明に当たった同組合の長瀬雅彦専務理事は今後の課題について「採算製造や農産物の加工販売、太陽光発電や雪水冷却システムによる省エネルギー化、綿密な品質管理などだ。これらを実現する施設を視察参加者は見て回った。施設の多くは、中古品を流用したり改良したりしてコストを削減した。「設備はみんな手作りで、自分で考え、工夫するのが楽しい」と和仁社長は話した。

建設トップランナー倶楽部幹事会の代表幹事の一人である米田雅子慶応大学特任教授は5月31日、視察会の事前研修の場で、山間部の公道や民道を結び、国土保全や防災に活用する「異種の道をつなぐネットワークづくり」を提案、会としてこれを推進する同意を参

加者から得た。米田氏が提唱したネットワークづくりは、国道や地方道、林道などの公道と、電力管理道や林道、砂防施設管理道などを結び合わせ、ネットワーク化によって有効活用するもの。東日本大震災では、林